

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

——伝説に生きる人々——

木村肥佐生

鯉渕 信一

1. はじめに

昭和54年7月から8月にかけて、インドネシアのジャワ島東部にあるテンゲル (Tengger) 山系のプロモ (Bromo) 火山とスメル (Sumeru) 火山周辺に住んでいるテンゲル (Tengger) 人の3村落——アダス (Ngadas)、アディサリ (Ngadisari)、ラヌパニ (Ranupani) ——を中心にいくつかの部落を訪問し、文化や言語に関する調査を行なった。このテンゲル人村落調査のそもそもの動機は、元のフビライ汗によるジャワ攻略 (1292年) の際の元軍残党部落を探し求めるといった突拍子もないようなものであった。

結局、テンゲル山系の山奥深くには「全く素姓の分らない、まだ外部との接触も殆どない小さな部落がいくつもある」という何人かの村びとの証言を得たものの、残念ながら「元軍残党部落」は、我々の今回調査したプロモ火山、スメル火山、カウイ (Kawi) 山、中部ジャワ・ディエン (Dieng) 高原の周辺ではその片鱗さえ見出すことはできなかった (フビライ汗のジャワ攻略の経緯や本調査の動機・経過などについては、アジア研究所報17号「ジャバ島に幻のモンゴル人を求めて」に詳述した)。

しかし、我々は調査したこのテンゲル人の3村落において、彼らの極めて興味深い宗教、風俗、習慣などを見聞することができた。プロモ火山の

頂上付近にひっそりと生活するその村びと達は、最近まで殆ど外部との接触を断ち、麓のテンゲル人の間にイスラム教徒化が進むなかで、頑固に古来の伝統的信仰を守り、今も神話や伝説とともに生活している人々であった。そして、プロモ火山を最高崇拝の火神と崇め、またプロモ周辺の山々には色々な守護神や精霊が住むと信じ、プロモ火山の自然現象の驚異を祖先の靈魂の喜怒哀楽だと信じて疑わない人々であった。

最近、この山深い村にもインドネシア政府の開発の手が差し伸べられてきた。馬か徒歩に頼るしかなかった平野部へ通じる道は自動車を通れるようになった。インドネシア政府はこのプロモ火山一帯を一大観光地にする計画を立てているとも聞く。平和裡に神々とともに生活するこのテンゲルの村も、急速な変化を余儀なくされようとしている。

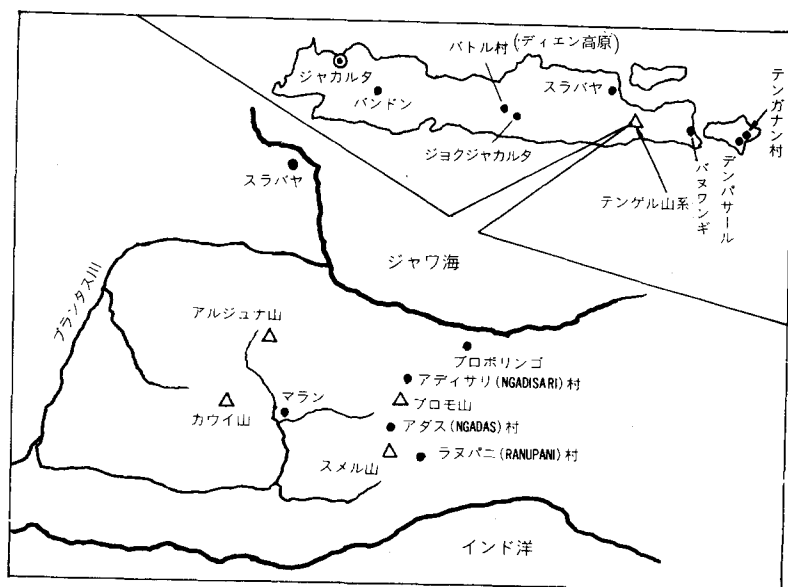
我々はジャワ史や宗教の専門家ではないので、このテンゲル人の歴史、あるいは宗教がジャワ史やジャワの宗教のなかでどのように位置づけられるものか分らない。しかし、ジャワにおけるヒンドゥー教と在来の原始宗教との係わり合いやイスラム教のジャワ伝播を考えるうえで十分研究に値するものであろうことは推測できる。そうした意味で、急激な変化が予測される今日、古来の信仰や文化のもとで生活しているテンゲル人の現状を報告しておくのもそう無意味なことではあるまいと考えた。

本調査にあたっては、準備段階の計画作成から現地での接衝、また帰国後の資料整理に至るまでエディ・ストリスノ・オットー君 (Eddy Sutrisno Otto : 亜細亜大学経営学部4年、インドネシア人留学生)の全面的な協力を得た。また現地での全行程、エディ君の友人——ヘンドロ・プラドノ君 (Hendro Pradono : インドネシア大学理工学部4年)とウィシヌ・ウドヨ君 (Wisnu Udoyo : インドネシア大学経営学部4年)の協力を得た。両君はジャワ語に精通しており、その通訳をお願いした。またヘンドロ君はインドネシア大学の登山部に所属しているとのことで、プロモ周辺の山にも詳しく、ポーターを仕立てての登山行にはなくてはならない存在であった。記

して感謝の意を表したい。

2. テンゲル村概観

テンゲル人はインドネシアの東部ジャワ、スラバヤ市の東南方にあるテンゲル山系中に住んでいる。このテンゲル人の村はテンゲル山系中のプロモ火山 (Bromo : 海拔 2,192m) とスメル火山 (Sumeru = Mahameru, 海拔 3,676 m) の周辺に点在し、約40ヵ村あるといわれている。しかし、その大部分はイスラム教徒化が急速に進んでおり、現在、テンゲル人古来の信仰、風俗、習慣を保っているのはプロモ火山山頂近くの3ヵ村だけである。プロモ火山は外輪山と中央の活火山から成っているが、その3ヵ村は外輪山の頂上近くに位置しており、北側の村をアディサリ (Ngadisari) 村、西側の村をアダス (Ngadas) 村、南側の村をラヌパニ (Ranupani) 村という。この3ヵ村はイスラム教徒住民は全く住んでおらず、イスラム教の文化的



影響も殆ど認められない。

この内、アディサリ村（海拔 1,990m）が最大で人口約 800人、プロボリンゴ（Probolinggo）から自動車が辛うじて通れる道路があり、3 ヶ村の内では一番栄えている。アディサリ村は山の急な斜面に小さな道路をはさんでウナギの寝床のように細長く並んだ村である。村の入口には、三重仏塔をあしらった小さな門があり、警察の駐在所（駐在警官は1人、テンゲル人）が置かれている。外来者はこの駐在所で名前と来訪の目的を記帳することになっている。村には日用雑貨類を売る商店1軒と食堂1軒があり、村の中央には唯一の水源である共同井戸（湧水を利用したもの）がある。村は山の急な斜面に沿ってあるため、家屋は斜面を削った台地に建てられていて、それぞれの家が下隣りの屋根を見下す形になっている。

アダス村は人口約 500人、アディサリ村と同じように家並が急な山道に沿って細長く並んだ村である。村には僅か数種類の食料品を売っている店が1軒あるだけで、食堂も共同井戸もない。水は毎朝、女性達が1km位離れた谷川までの山道を身長よりも長い、直径30cm位の太い竹筒を背中に斜めに背負って汲みに行く。この村には1978年9月から1979年1月までの間に村開発と道路整備に向けて、インドネシア政府から約 5,450万ルピーが投資されたという。その結果、マラン市へ通じる道路が開かれている。しかし、そのマランへの道路も雨季には通行不可能となる。

ラヌパニ村は人口約 300人、この3 ヶ村の内では一番貧しく遅れている（ジャワ島では一番高い所にある村とのこと）。アダス村から更に7～8km程山道を登った所、丁度スメル火山の登山口にあたる所にある。上記2村と違って、やや平らな盆地のような所に位置するが、スメル火山の火山灰が村を覆い、野菜も十分育たないという3 ヶ村のうちでも特に痩せた土地にある。商店、食堂は1軒もない。水は村はずれの低地に山から引いて貯水槽に溜るようになっている。アダス村へ通じる山道が唯一の道路で、他に平野部に通じる道は全くない。アダス村へのこの道は、乾季だけでも自動

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

車が通れるようにと、村びと達の勤労奉仕で整備されつつあった。

それぞれの村の周囲は急斜面にもかかわらず良く開墾されていて、段々畑がきれいに並んでいる。どの村も火山灰の痩せた土壌で、農作物の収穫は豊かではないようであるが、それでもトーモロコシ、ジャガイモ、玉ネギ、キャベツなどを麓の町へ共同出荷で送っている。これが唯一の現金収入で、その他に産業らしきものは全くない。道路ができるまでは、この農作物の出荷さえ困難で、殆ど現金収入の道はとざされていた。

主食はトーモロコシを臼で粉砕して蒸し、塩味で食べている。しかし最近では平野部から米が送られてくるようになり、米食の比重が高まっているとのことである。各村とも鶏がよく飼われており、鶏卵が彼らの重要な蛋白源になっている。

各村には電気は通っておらず、ランプを利用しての生活であり、燃料は自分達で焼いた木炭を利用している。木炭は、各村とも高地にあり朝晩相当地に冷込むため暖をとるためなどにも広く利用されている。

インドネシア政府の積極的な少数民族地区開発政策によって各村の生活水準は向上しつつあるが、反面、テンゲル古来の文化に代ってインドネシア化が進もうとしている。各村に一つづつ置かれている小学校には政府から教師が派遣され、インドネシア語による授業が進められており、言葉の面においても、近い将来、インドネシア語が現在のジャワ語にとって代ることは確実と思われる。

山林を開墾して若干の金を国に支払えばそこを自分の耕地とすることができるので、村びとはある程度の畑を所有しており、また村落共同体的な意識が強いので貧富の差は殆どないようである。

高地で涼しく、湿度が低く、他のインドネシア地域と比較して快適な気候にあるためか彼らは非常に勤勉であり、また大変温和で親切でもある。彼らは自分達を聖なるプロモの民徒であると誇りにしているのである。こうしたテンゲル人の道德觀念の高さを評してインドネシア情報局発行の

「Our Tengger」は次のように述べている。「……テンゲル人はこの世で最も親切な人々である。海拔 5,000～8,000フィートの高地の村々で彼らは単純かつ健康的な、幸福な生活を送っている。発生する犯罪は少なく、非常に高い道徳観念をもっている……」⁽¹⁾。また李炯才 (Lee Khoon Choy) は「テンゲル族の土地は平和で犯罪がないので、暴行とか盗み、詐欺といった犯罪を罰する約定はない。だれかが犯罪を犯すと村長が非難することで、犯罪者に対する十分な責めと罪になる」⁽²⁾と報告しているが、我々もこの犯罪に関する約定について、李炯才と同様の回答を得た。

各村とも村の中央にケントンアン (Kentongan : 直径40cm、高さ1 m 位いの木を縦に半分に切り、内側をくり抜いたもの) と呼ばれる警鐘が置かれている。それを2回叩いて鳴らすと人殺しが起ったという合図、4回でコソ泥、6回で火事、8回で地震など村全体の被害、9回で“中位い”の泥棒、10回鳴らすと大泥棒の合図だというものであるが、今まで殺人などは絶えて起ったことはなく、稀にある泥棒などは殆ど外部の者の犯行であるという。もちろん村では昼夜を問わず戸締りの必要などはない。

村びと各個人には村落共同体のメンバーという意識が強く、相互扶助の観念が徹底しているようである。従って、逆に犯罪が生じた場合には村全体を汚したことに[?]なるという。ここにもまた、村びと自身が聖なるプロモの民徒であるという意識が働いているのであろう。

村の組織は、政府の管轄下に入る行政面でのリーダー6名とテンゲル独自のリーダー2名が指導的役割を果たしている。行政面はルラ (Lurah 村長)、チャリク (Carik : 副村長)、カンブン・ポリシ (Kampung Polisi 警察関係)、カンブン・ガウェ (Kampung Gawe : 労働関係)、ケバヤン・チャチャル (Kebayan Cacar : 医療関係)、ケバヤン・ラタル (Kebayan Latar : 開発関係) という役割分担になっている。テンゲル古来のリーダーにはカミトゥオ (Kamituwo : 村長) とドゥクン (Dukun : 司祭者) がいる。行政面の村長ルラが官公庁の意を受けての役場の仕事 (例えば税金を集める等) をす

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

るのに対して、カミトゥオは村の精神的な長としての立場にあるといえる。村のもめごとをまとめたりするのはカミトゥオの役目である。カミトゥオは村で一番尊敬される人間が選ばれる。これに対してドゥクンは宗教的行事一切のリーダーで、占いをしたり、病気の治療を行なったりして最も畏敬される（他のジャワ人部落にもこのカミトゥオとドゥクンに似た制度がある由）。

3. テンゲル人の由来

テンゲル人の外見と言語は中央ジャワのジャワ人に良く似ているといわれているが、彼らがもともと何処からきたのか、まだ“テンゲル”の意味もはっきり分っていない。彼ら自身、民族の起源に関する歴史をすっかり忘れ去っているかのようなのである。ただ彼らに伝わっているのは「テンゲル名称由来の伝説」だけである。しかもその伝説も僅か 500～600 年しかさかのぼらず、テンゲル人は自らの歴史を強いて葬り去ってしまったのではないかという疑問さえ起ってくる。

テンゲル人の由来について、アディサリ村の古老はこんな伝説を話してくれた。

「マジャパヒト王朝時代、プラブ・ブラウィジャヤ (Prabu Brawijaya) という王様の娘ロロ・アンテン (Loro Anteng) とブラーマナ (Brahmana : 仏教) の僧侶の息子ジョコ・セゲル (Jako Seger) が結婚しました。しかし何年かするとそこに新しい宗教 (イスラム教を指すと思われる) が入ってきて生活が脅かされました。そこで二人は東の方へ逃げ、プロモ火山の山中に隠れ住みました。そうして二人は大変幸せな生活を送っていましたが、どうしても子供ができません。二人は子供が欲しくてプロモ火山に行き何日も何日もお祈りしました。

するとある日、火口から爆発の音が聞こえ、同時に閃光が走ったのです。二人はそれが神様の答えであると確信しました。しばらくするとロロ・ア

ンテンが妊娠し、待望の子供が生まれました。その1番目の子供の名前はトメンゲン・クレウン (Tumenggung Klewung) と名付けられました。二人にはその後次々に子供が生まれ25人の子供ができました。その25番目の子供はクスマ (Kusuma) と名付けられました。

ところが1番目の子供が生まれる前、二人は“もし子供ができれば最後の子供をプロモの神に捧げます”と神に誓っていたのです。25番目の子供が最後の子供であると感じた時、二人の幸福な生活は悲しい生活に変わってしまいました。何としても子供をプロモに捧げることができない二人は、末子のクスマをある所にかくしました。すると、それからプロモ火山は爆発を繰返えし、村では凶作の年が続き、悪い病気が拡がり、死人が出はじめました。

ジョコ・スゲルとロロ・アンテンは村の不幸の原因は自分達がプロモ火山への誓いを破ったからだと考え、村の運命を心配し、事の次第を25番の子供クスマに話しました。クスマ少年は両親からその話を聞いた後、“喜んでプロモの神のもとへ行きましょう”といてその役を引受けました。ジョコ・スゲルは末子のクスマを一番愛していましたが、しかし神への誓いは守らなければなりません。クスマを連れてプロモ火山に登り、涙とともにクスマを火の神に捧げました。

やがて村全体はまた豊かな幸せな生活が戻り、プロモ火山の爆発もおさまりました。そして24人の子供達の子孫は大いに栄えたのです。そして祖先ロロ・アンテンとジョコ・スゲルの末尾の“テン”と“ゲル”をもらって⁽³⁾テンゲル人と名乗るようになったのです。」

この伝説にはいくつか異説のものがある。「Our Tengger」に採録されたものも、李炯才や斉藤正雄⁽⁴⁾の採録したものも、それぞれ少こしづつ異っている。しかし、プロモ火山に祈って妻が子供をもったこと、また子供の一人をプロモ火山に生贄として捧げたことは、いずれの場合でも共通した主要な点である。そしてテンゲル各村の人々は、今日もなお、クスマ少年

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

の犠牲的献身をしのび、プロモ火神の気持ちを鎮めるためクソド月 (Keso-do : テンゲルの月の呼び名で12番目の月の意—太陽暦2月) の14日、15日クソド祭りというプロモ火神祭礼を盛大に行なっている。

このロロ・アンテンとジョコスゲル伝説以前、テンゲル人がどこに住んでいたかについて彼らは「我々の祖先はもともと此処に住んでいたのではない。バヌワンギ (Banyu wangi : 図1参照、但し彼らのいう Banyu wangi がこの図1の所であるか否かは不明) という海岸に近い所に住んでいた。その当時、我々の祖先はヒンドゥー教をもっていた。そこへイスラム教が入ってきた。戦ったが敗れて逃げてきた。バヌワンギからこのテンゲルの地に来るまで四ヵ所 (どこか不明) を転々として、やっとこの地に住むようになった⁽⁵⁾」と信じている。

彼らの歴史を知る手掛りとしては、テンゲル人のウォノキトリ (Wono-kitri) 村で1880年に発見された古代ジャワ語の銅板碑文があるのみである。これは1405年頃に刻まれたとされるもので、テンゲル山系の数ヵ村に対して、その地域の住民は聖なるプロモの召使いであるからティティルマン税 (Titilman : 新月毎に納める税)⁽⁶⁾ を免除する旨を命令した文書であるが、このことから少なくとも当時すでにプロモ火山を崇拝の対象として生活するテンゲル人が住んでおり、しかも、その彼らの信仰がヒンドゥー教の分派と見做されていたことはわかる。しかし、テンゲル人がテンゲル山系にいつ頃から住みついたのか、それ以前は何処に住んでいたかなどは彼らのこうした口伝の伝承があるのみで全く不明である。

テンゲル人が、水の便が極めて悪く、しかも土地の痩せたこの地に最初から住んでいたとは思われない。彼らの伝承が語るように“海辺の近くから来た”のであろうか。7世紀にはじまって13世紀のマジャパヒト王朝の成立によって最高潮に達したジャワのヒンドゥー教文化が、イスラム教の隆盛とともに衰退し、ヒンドゥー教信奉者達が内陸部の森林深く、あるいはバリ島へ逃れたと同じような運命をたどって、テンゲル人は平野部での

抗争に敗れ、自らの信仰を守り抜くために敢えてこの山中に安住の地を求めたのではないだろうか。

4. テンゲル人の信仰

テンゲルの人々に「宗教は何ですか」と聞いてみると、「ヒンドゥー教」または「ブッダ・マハヤナ (Budha Mahayana)」と答える。しかしこのことは必ずしも彼らがヒンドゥー教徒、仏教徒であることを意味しない。はっきりしていることは「自分達はイスラム教徒ではない」ということである。彼らの信仰は基本的に山嶽信仰であり、神霊崇拜で、その土台のうえにヒンドゥー教が融合したもののようである。ジャワのヒンドゥー教は、ジャワ原始宗教と融合して独得の信仰形態を示していることからヒンドゥージャワ教などと呼ばれているが、テンゲルのそれは「ヒンドゥーテンゲル教」と呼ぶにふさわしいものである。カースト制度の存在や不殺生の観念、牛の神聖視などはヒンドゥー教の最も知られていることであるが、テンゲルには全くカースト制度はなく、牛を神聖視する観念もなく、牛肉も好物の一つであることをみても、テンゲルの“ヒンドゥー教”がいかに特殊なものか理解されよう。

テンゲル人の観念によれば、諸々の神々はマハメル火山 (Mahameru = Sumeru = 最高寺院の意) に住んでいる。これら全ての神々の中でプロモ (Bromo = Brama) は特別の意味を有している。それは火の神であり、畏怖すべき最高の自然現象として神霊崇拜者であるテンゲル人の特殊な崇拜対象として常にありつづけてきたのである。彼らは、プロモ火山を「テンゲル人全体の祖霊」であると礼拝し、テンゲル人の来世はプロモ火神のもとを経てマハメル火山に住むと信じている。

テンゲル人はプロモ火神への厳粛な信仰の証として、盛大にクソド祭礼 (Kesodo) を行なう。クソド月 (クソドはテンゲル暦の12月、太陽暦の2月にあたる) の14日の真夜中、すべてのテンゲル人がドゥクンを先頭にプロ

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

モノの火口に集まり、生贄となった伝説中のクスマ少年の献身をしのび、火神の怒りを鎮め、また村の平安を祈念して火口に野菜、米、鶏、羊から衣類まで供物として投げ入れる。これらの供物はクスマ少年の必需品と考えられている。この祭礼は、テンゲル人の祭儀のうち最も盛大で、しかも重要なもので、彼らの祖霊崇拜とプロモ火山への畏敬がよくうかがえる。

テンゲル人にとってのもう一つの重要な宗教的祭礼にカロ祭礼(Karo : テンゲル暦2月、太陽暦4月)がある。カロ祭礼はテンゲル人の靈魂を祀る儀式であり、また新年祭でもある。このカロ祭礼は、クソド祭礼の厳肅な儀式とは違い、踊りと唄で賑やかに行なわれ、トサリ村(Tosari)から始まって、各村に次々と引継がれ2週間続くという。ここで踊られる踊りは、伝説にもとづくもので踊り手が7人ずつの2グループに分れ、アジ・シャカ(Aji Saka : この伝説の主人公——ジャワ人に文明をもたらした最初の人とされる)の忠実な家来とモハメッドの使者との間で繰上げられた戦いを演じてみせるもので、この戦いを称える踊りだと考えられている⁽⁹⁾。この踊りのアジ・シャカ伝説には、ジャワ古来の宗教とイスラム教との宗教闘争が表現されている。

テンゲル人の大きな祭儀は、このクソド祭礼とカロ祭礼の二つだけで、日々の宗教生活はケプンデン(Kepunden)と呼ばれる神殿で行なわれる。ケプンデンは村全体を見下す丘の上にあって、大体小さな社で、なかには社のないものもある。そこにはベリンギン(Beringin = ガジュマル)の古木がはえていることが多く、このベリンギンの木には死んだ人々の靈魂が宿ると信じられている。(アディサリ村にはインドネシア政府の援助で建てられた立派な神殿があったが)。そこには神像は全くなく、神殿の土中に黒い大きな石が埋めてあるだけである。そこで人々は満月の時、それから毎週月曜日と金曜日にドクンと共に礼拝する。もちろん人々は、その神殿でいつでも個人で礼拝することもできる。災害のあった時、収穫のあった時なども礼拝が行なわれる。

家庭内にあつては祭壇を設けて特定の日、あるいは何か願いごとがある時に供物をして礼拝する。また、テンゲル人は火を極めて神聖視するところから暖炉や竈に特別な崇拜観念をいだいており、竈に供物をしたりする。

また、テンゲル人は山、川、草、木、火から石にいたるまで、あらゆるものに神が宿ると信じて、その諸々の神の怒りに触れまいと努力する。例えば、火をまたいだり、足を火の上に乗せたりすると火の神が怒り目の病気になる、沸かした湯をすてたりして無駄をすると火の神が怒って皮膚病になる（生水をすてるのは、生水は草木に益するので無駄にはならないという）、他人の物を盗むと、盗んだ人の良い運が盗まれた人に移ってしまうと信じている。

5. 通過儀礼

(1) 出生

テンゲル人の間では臍の緒が非常に大切な意味をもっているようである。

生れた子供は臍の緒が切れるまでの約1週間、家族は片時もその子供から目を離さない。目を離したりすると悪魔に食われてしまうという。臍の緒は竹を薄く削った竹で切るが（竹に Knyit = サフラン？の花をつけるといふ）、切った臍の緒はヤシの実の殻に入れて、屋根の下に掛け、家族のお守りにする。また臍の緒を切る時には、子供のいる部屋に刺のある枝のついた花をさして置く。これは悪魔が来ないようにというお守りである。臍の緒が取れる時にはウパチャラ・ケケレ（臍の緒が取れる時の感謝の祈り）という祈りを捧げるといふ。臍の緒の残りは白い布に巻いて親が大切に保存し、その子供が17才になった時子供に与えて、その後の子供自身のお守りにするという。

また、ゴトンの祝い (Selamatan Gotong) という祝い事もある。これは1番目と3番目の子供が女で、2番目の子供が男であれば、その男の子のためにお祝いをするというものである。

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

臍の緒が取れた時、その子供の名前がつけられる。名付けは親かドゥクンが行なうが、それはハリ・パサラン (Hari Pasaran) といわれる一種の暦占いによって決められる。また、その子供の職業もその時決めてしまうという。その決め方は星占いで決めるという非常に珍しいものである。西星に生れると商人かポーター、東星に生れると商人か大工、南星は農民かポーター、北星の生れは一定の職をもてない者だとして職が決らない。そして中央星は司祭者など宗教関係の職に就くという。

子供が生れると親はセサジェン (Sesajen) と呼ばれる五色の飯 (赤、白、黄、青、黒) を一皿に盛り、花を飾って馳走をする。これらの色はテンゲル人の好む色であるが、特に赤色は母親、白色は父親から伝った色として大切にするという。

(2) 結 婚

テンゲル人のしきたりによれば、結婚の相手は彼ら自身と同じ「ブダ・マハヤナ」を信仰する者でなければならない。もし異教徒と結婚しようとするれば、その異教徒はテンゲル人の宗教に改宗しなければならないとされている。改宗しないでの結婚は決して許されず、それでも結婚しようとする場合は村を離れることが要求される。

河村寛樹氏の調査したトサリ村では、テンゲルのそのしきたりは破られ、イスラム化が進んで現在では2564人の村民中、約25%がイスラム教徒であるという実態 (1971年) が報告されている⁽⁷⁾。しかし、我々の調査したアディサリ、アダス、ラヌパニの三カ村にはテンゲルの民族信仰者とイスラム教徒の結婚というケースは1件もなく、従ってイスラム教徒の住民は皆無であった。

結婚の儀式は本質的にジャワ人のそれと殆ど変わらないようである。ドゥクンが竈の上 (竈はテンゲル人の家庭内で最も神聖な所とされている) に、祖先の霊と見なす花や木の葉で作った人形を飾った祭壇を作り、新郎・新婦はその前で礼拝する。礼拝はプロモ火山の方向、次に竈、大地、農機具の

小屋の順に行なう。そして新郎はしつらえられた台の上に置かれた鶏のタマゴを足で踏み割る。新婦は新郎のその足を水で洗う。このタマゴを踏みつける儀式は、二度と元に復さないという意味であるという。最後にドゥクンが祖先の霊と見なす人形に向って、プロモ火神への祈りの言葉を捧げて式を終える。

一夫一妻を原則としているが例外もあるようである。例えば、財力があり、しかもどうしても2人目の妻を欲しいという時、その相手が本妻と姉妹である場合に限り許されるという。(アディサリ村で我々を宿泊させてくれた Jumhari 氏も姉妹二人の妻を持っていた)。また、妻が浮気をしてそれが発覚した場合、夫はその妻と離婚しない状態で新しい妻を迎えることができるという。これは浮気した妻に対して一生の罰を与えるという意味を持っている。テンゲル人にとって浮気は非常に罪悪視される行為のようで、彼らは浮気をすると「その後の自分の運命が悪くなる」と考えている。小さな村落内でのトラブル発生源をつみとろうという生活の知恵であろうか。

結婚年齢は、一般的には男子25才前後、女18~20才位いで、子供の数は多くて5人までである。子供が5人までというのは、テンゲル人の言い分によれば「テンゲル人は5人以上の子供ができない。もし6人目が生れてもその子供は必ず1年以内に死んでしまう」からだという。問引きするのではという疑問に対しては「6人目の子供はひ弱で、良く乳も飲もうとせず、決して育つことなく死んでしまうのだ」と言い張る。

(3) 死

テンゲル人の観念によれば、死者の魂は葬送の儀式が終ると、まずプロモ火山へ行き、プロモの地獄の火の海を抜けて極楽のマハメル山(スメル山)へと向い、そこで多くの諸々の神と共に住むという。

テンゲル人の埋葬の習慣は土葬で、バリ島のヒンズー教徒に見られるような火葬は行なわれない。

遺体は白い布で覆い、花や竹を敷きつめた墓穴に頭を南に向け、顔をブ

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

ロモ火山に向けて墓の中に埋められる。頭を南に向けるというのは、カロ祭礼の伝説にもとづくものとされている。アジ・シャカの忠実な家来スチャ (Setija) とマホメッドの使者ツフ (Tuhu) が死闘を繰り上げたことは前述したが、その時スチャは頭を南 (プロモの方角) にして、またツフは頭を北 (メッカの方角) にして力尽きて倒れてしまう。このスチャの倒れた方角がテンゲル人の埋葬方角となったという。遺体を覆った白い布は頭の上、腹、足の下のカ所が紐で結ばれる。そこには以後決して地上との接触をさせないという意味が込められている。

埋葬後 7 日間、墓に垂直にたてられた中空の竹ざおに清水がそそがれ、皿に盛った供物が死者に供えられる。7 日目に親族や友人の間で供養が行なわれる。葉で作られた、衣服も着けた死者の人形が据えられ、香が焚かれ、礼拝が行なわれる。礼拝後、その人形は燃やされる。最近是人形と一緒に死者の写真が 1 枚焼かれることが多いという。

それ以降 1,000 日経過するまで、死者を悼む儀式は何もなく、1,000 日目にニュー (Nyewu) と呼ばれる供養が行なわれる。このニューは村びとを多数招待して、最も盛大に催され、牛 1 頭、山羊 1 頭、数羽の鶏が殺されることも稀ではないという。

葬式から 7 日目の供養とニュー以外、儀式と呼ばれるようなものは行なわれないが、家族は月曜日または木曜日、ケムバン・ボレー (Kembang Borer) と呼ばれる黄色の花と、皿に盛った食物を墓に供えている。このニェカル (Nyekal) と呼ばれる故人への供養は、少なくとも 1,000 日目までは欠かさず行なわれる。

子供が結婚前に死ぬと、親はその子供が結婚年齢に達した時期に、結婚式を挙げてやるという。

また、農作物の収穫があった時、テンゲル人はその収穫物をプロモに捧げると同時に、親族の墓にも供える。これはタンピン (Tampin) と呼ばれ、感謝の気持を表現するものであるという。

6. 「テンゲル語」

テンゲル人の言語については、まだよく解明されていないが、ジャワ語と同系統の言語であるというのが定説になっているようである。「Our Tenger」は「中部ジャワのジャワ人の言語とよく似ている」⁽⁸⁾と述べており、また河本寛樹氏も「ラッフルズ (Raffles) は The History of Java の中でジャワ語 100語に対してテンゲル語と相違しているのは2、3語にすぎないと述べている」⁽⁹⁾と指摘している。実際、我々も調査を進めるに当たってはジャワ語を介してその目的を達することができたのである。(麓の村は殆どインドネシア語社会になっているようであったが、アディサリ、アダス、ラヌパニの3カ村ではインドネシア語はほんの片言通じるだけであった。また彼らの話すジャワ語には古代ジャワ語が頻繁に使われていた)。

しかし、テンゲル人自身は「今残っているテンゲル語はほんの僅かだが、昔はジャワ語とは全く異ったテンゲルの言葉があった。」と主張する。アダス村では、テンゲル人がなぜジャワ語を話すようになったかというカミトウオのこんな伝説を聞いた。

「500～600年くらい昔、この村にカパク (Kapak) と呼ばれる悪党団が入り込みました。その悪党団は村で強盗、殺人など悪事の仕放題でしたが、村びとの力ではどうすることもできませんでした。村びと達がカパクの悪事に苦しんでいる時、1人の男が村にやってきました。その男の名前はMban Sedek といい、西の方から来たということでした。彼は仏教徒で膚は黄く、身体の小さい人でしたが大変力の強い人でした。彼は弓矢を武器にカパクに立向い、彼らを倒し、村をカパクから救ってくれました。そして村にはまた平和が訪れ、村びとも豊かになりました。

その後Bban Sedek は自分の仲間を呼寄せてこの村に住むようになりました。村びと達はMban Sedek を村の救いの神様であると崇め、彼と彼の仲間が使っていた言葉 (ジャワ語) を習いました。それ以降、この村

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

の人々は自分の言葉を忘れ、ジャワ語を使うようになりました」。

アダス村の中央には、村の救い主として、今もこのMban Sedekの墓が大切に祀られ、毎週金曜日には花や食べ物がかさず供えられている。

またそこにはMban Sedekの墓と並んでAsmo Kertoという人の墓がある。Armo KertoはMban Sedekの死後、やはり他の土地から来た人で、顔立ちから行動までMban Sedekにそっくり似ているので、Mban Sedekの生れ変わりだと信じられ、一緒に祀られているのだという。テンゲル人はこの伝説に基づいて、Mban Sedek以前はジャワ語とは別個の言葉を話していたと信じている。しかし、彼らの話すジャワ語の中に「彼ら独自のテンゲル語」はラッフルズのいう「ジャワ語 100語に対して2、3、語の相違」であった。調査の中で彼ら自身に、身体名称、基本的動詞、数詞などのうち彼らのいう「テンゲル独自の言葉」を挙げてもらったが調べてみると、はっきりとジャワ語と分るもの、あるいはジャワ語から派生したと明らかに考えられるものが殆どであった。彼らの「テンゲル語」とジャワ語との区別は極めて不明確のようである。例えば彼らは次のようなジャワ語をテンゲル語として挙げている。

endas (頭)、wadja (歯)、koeping (耳)、mumbut (髪)

jampolan (親指)、kapal (馬)、ingsun (私—女性語)、

gaga (畑)、pajah (疲れる)、goewek (泣く)、lodong (死ぬ) 等々。

彼らが「テンゲル語」であるとして列挙した約80単語のうちで、あるいは「テンゲル語」かも知れないと思われるのは、

reyang (私—男性語) → (ジャワ語はkolo、dalem、aku 等)

sren (太陽) → (ジャワ語はmentari)

loengkak (下) → (ジャワ語はngisor、ngandap 等)

injing (箱) → (ジャワ語はkrandjang)

だけであった。但し、これらの単語も、我々が「Javanese English Dictionary」 「Javaans Nederlands Handw ooderboek¹⁰⁰」等二、三のジャ

ワ語辞典の中にその存在が確認されなかったということで、「テンゲル語」と断定できるものではない（ジャワ語専門家のご教示をお願いしたい）。

文法構造も次に例示するようにジャワ語と殆ど違いはない。若干、ジャワ語に較べて前置詞が多く使われているようであるが、こうした例は中部ジャワの言葉に多いということである。（T—テンゲル語、J—ジャワ語）

① 昨日 私(は) 畑(を) 耕 した。
 1 2 3 4 5

(T) Wi⁻ngi reyang wis gaga molah.
 1 2 5 3 4

(J) Kolo wingi kulo (dalem) sampon nggarap sawan.
 1 2 5 4 3

② 今 日 私 は 町 へ 行 く。
 1 2 3 4 5

(T) Dinaiki reyang lu⁻nga nang pasar.
 1 2 5 4 3

(J) Dinaten meniko kulo tindak pasar
 1 2 5 3

③ そ の 女性 は 私 の 妻 です。
 1 2 3 4 5

(T) Wong wedo ika bojo ne reyang.
 2 1 5 4 3

(J) Tiang estri meniko seman kulo.
 2 1 5 3

ただ、月の呼称のようにジャワ月の7月 *kasa* がテンゲル月では1月に
 当り、ジャワ月の8月 *karo* がテンゲル月の2月、2月 *wolu* が8月
 というような例もある。尚、テンゲル月の呼称は1月 *kasa*、2月 *karo*、
 3月 *ket:go*、4月 *katat*、5月 *kalimo*、6月 *kanen*、7月 *kepitu*、8
 月 *wolu* (ジャワ—*kawole* or *wole*) 9月 *kesongo*、10月 *kasepoeloe*h、
 11月 *desto*、12月 *kesodo* (ジャワ—*sada*) である。

今回の我々の調査では、所謂“テンゲル独自の言語”が一体どういう性
 格の言葉であるのか全く見当をつけることさえできなかった。しかし、か

ジャワ島・テンゲル人調査ノート

つては「Mfan Sedek 伝説」の語るように、彼らの間ではテンゲル山系周辺で話されていたジャワ語とは“異った言葉”が使われていたには違いない。ジャワ文化の侵透とともに次第にジャワ語がその「異った言葉」にとって代ったのでないだろうか。そう考えないと「Mban Sedek 伝説」の存在の意味が理解できない。

しかし、そのジャワ語以前の“異った言葉”がジャワ語とは全く別個の言葉であるのか、あるいはジャワ語の一方言的な分派に過ぎないのかはよく分らない。恐らく、系統論的には、少なくともジャワ語の系統に属するものと想像されるが、何しろかつてテンゲル人は文字を持たず、自らの言葉で記録したものを一切残していないし、現存する単語の数も余りに少ないため、その解明は容易ではない。

註

- (1) Department of Information of the Republic of Indonesia, Our Tengger, Djakarta 1960, P 3.
- (2) 李炯才著、伊藤雄次訳、「インドネシアの民俗」サイマル出版会1979年、162頁。
- (3) Jumahari 氏談（アディサリ村で宿泊した家の主人、57才）
- (4) 斉藤正雄、「南洋群島の神話と伝説」、寶雲舎、昭和16年。
- (5) 前掲 Jumahari 氏及び Ngarsono 氏談（アディサリ村より同行のポーター、56才）
- (6) 前掲 「Our Tengger」、7頁。
- (7) 河本寛樹、「テンゲルの人々」（南方文化才2輯）天理南方文化研究会、1975、184頁。
- (8) 前掲 「Our Tengger」5頁。

(9) 前掲「テンゲルの人々」179頁。

(10) Th. pigeaud, Javaans Nederlands Handwoordenboek, Amsterdam.

E, Clark, Javanese English Dictionary, Yale University, 1974.